

令和2年度 つたえる、感じる、つながる、森林×SDGsプロジェクト事業  
森林空間を活用した教育イノベーション検討委員会（第1回）議事概要

1. 開催日時：令和2（2020）年9月4日（金）10：00～12：00

2. 場所：Zoom

3. 出席者： ※敬称略、委員五十音順

<委員>

- ・天笠 茂 千葉大学特任教授 中央教育審議会副会長
- ・指出 一正 「ソトコト」編集長
- ・島田 由香 ユニリーバ・ジャパン・ホールディングス株式会社 取締役人事総務本部長
- ・竹内 延彦 長野県池田町教育長 森と自然の育ちと学び自治体ネットワーク副代表
- ・南方 慎治 株式会社ルネサンス 営業企画部トラベルチーム課長
- ・宮林 茂幸（座長） 東京農業大学地域環境科学部 地域創成科学科教授  
美しい森林づくり全国推進会議 事務局長
- ・山下 宏 文京都教育大学教授 元森林ESD研究会座長
- ・吉弘 拓生 内閣官房地域活性化伝道師 総務省地域力創造アドバイザー

<オブザーバー>

- ・榎木 奨悟 文部科学省総合教育政策局地域学習推進課 地域学校協働活動推進室 室長補佐

<林野庁・事務局>

- ・木下 仁 林野庁森林整備部森林利用課 山村振興・緑化推進室 室長
- ・藤岡 義生 林野庁森林整備部森林利用課 山村振興・緑化推進室 課長補佐
- ・根岸 由佳 林野庁森林整備部森林利用課 山村振興・緑化推進室 森林環境教育推進官
- ・福長 絢一郎 林野庁林政部企画課 課長補佐
- ・萬宮 千代 (株) かいほつマネジメント・コンサルティング シニアコンサルタント
- ・田中 博幸 (株) かいほつマネジメント・コンサルティング シニアコンサルタント
- ・川元 美歌 (株) かいほつマネジメント・コンサルティング シニアコンサルタント
- ・野口 翠 (株) かいほつマネジメント・コンサルティング コンサルタント
- ・橋本 卓道 (株) かいほつマネジメント・コンサルティング コンサルタント
- ・梅永 優衣 (株) かいほつマネジメント・コンサルティング コンサルタント
- ・小野 なぎさ 一般社団法人 森と未来 代表理事
- ・マンジョット ベディ Just on time CEO

#### 4. 議題：

##### (1) 検討委員会の設置

- 1) 本事業の趣旨説明
- 2) 運営規則の確認
- 3) 委員等紹介
- 4) 座長の選出

##### (2) 議 事

- 1) 教育イノベーションについて
- 2) モニターツアー、ワークショップについて
- 3) 今後の予定

#### 5. 概要：

(1) 林野庁森林整備部森林利用課 山村振興・緑化推進室 木下室長による挨拶、本事業の趣旨説明の後、事務局から運営規則の確認および委員等紹介、座長の選出を実施。

(2) 事務局より森林環境教育イノベーション調査実施方針（案）について説明を行い、質疑応答を実施。各出席委員等からの意見は以下のとおり。

- ・ 森で遊べる大人が少ないために、森林へ訪れることの敷居が高くなっている。子どもたちを教育する前に、特に今後子育てをする可能性の高い 20~30 代の森への接点・接触率を上げることが重要。その場所に興味がなくても、人が現れることでその場所の課題解決に繋がることもある。森だからというよりも、その場所に人が集まることで、教育イノベーションや人と森の関わりが起きるのではないか。森との関わりを作ることと、中・長期的に森について教えられる人を育てることが大切である。(指出委員)
- ・ 我が国は自然災害と常に一緒にあり、わたくしども国民はその折々に森林が国土の保全に重要な意味をもたらしてきたことを、体験的に知っている。教養としての森林という意識を、様々な立場の人々に持ってもらうことが、このプロジェクトの目指すところではないか。そのためにはイノベーション、体験、イベントなどの手法とともに、学校教育との接点についても考える必要がある。学校教育のなかで、森林環境教育に関する授業を意義のあるものにするためには、どのような形で先生へのサポートができるのかについても検討すべき。(天笠委員)
- ・ 転校は、家族単位で考えた時にボトルネックとなるため、デュアルスクールを全国展開すべきだと考える。学校は自治体と連携しながら子どもを受け入れ合い、親はリモートワークを行うということがセットになると良い。ボトルネックとして、企業の在り方、および仕事に

対しての意識について話があったが、今後、雇用のあり方は変わっていくため、企業のフレキシビリティと法制度が絡んでくる。企業が、森林で研修する選択肢に気づいていない理由の一つとして、そのベネフィットを知らないことが考えられる。個々人のウェルビーイング、パフォーマンス、およびレジリエンスの向上に、森林がどの程度効果があるのかについて、メディカルデータをとって示すべき。役職が高く決定権を持つ方々に森林体験をしていただき、森林との関わりの中からも気づく機会の創出が必要。(島田委員)

- ・ 保育や学校の先生方の中には、自然の中でどう遊ぶべきかわからない方も多くいる。実際に自然の中に行くと、何もないようで多くの資源があるので、それに気づく機会を大切にしたい。今後の自然との付き合い方は、自然のなかにプログラム化されたメニューを沢山用意して、その中から選ぶのではなく、何もない楽しさを子どもたちと味わうものである。自由や余裕などを大事にしないと、子どもたちの成長、生きる力には繋がらないのではないかと。気持ちや体の自由、余裕を、この調査や事業でも大切にしていきたい。(竹内委員)
- ・ ゲームを通じた間接体験に取り組む子どもが多いなか、我々の役目は、子どもたちが自然を直接感じる体験を提供することだと考えている。実際に森の中で観察していると、子どもたちはこちらから何も指示しなくても、自分たちで考え遊んでいる。ちょっとした段差、川、足元が不安定な場などの条件が揃った森で、考え、遊ぶことによって、心身の成長に繋がると考える。(南方委員)
- ・ 森林環境教育の現状について、小学校から高校が提供するサービスとして、学校行事としての森林体験を捉えられているが、実際にはもう少し進んでおり、総合的な学習の時間や教科の中で森林について学んでいる。教室の中で学んだ内容と、実際の森林現場で学んだ内容とをいかに結びつけていくのかということが、学校教育における今後の課題である。聞き取り調査の対象を小学校、中学校、高校の教員に広げ、「どのように森林環境教育を行おうと考えているのか」「なぜできないのか」について調査する必要がある。森林の重要性と同時に、森林環境教育を通して子どもたちが育むことのできる能力についてエビデンスを示し、教育課程の中でも森林環境教育が重要な役割を果たせることを普及すべき。(山下委員)
- ・ 森林環境教育という言葉が根付いていない理由の一つとして、森林との関わりが色々な形で徐々に広がっているものの、ひと時のブームであること挙げられるのではないかと。根付かせていくためには、何が期待されているのか現場の声を聴くことが必要である。(吉弘委員)
- ・ 根付かせるためには、森や樹木、緑を、いかに暮らしや生活の中に入り込ませることが重要。森林が生活の中に入り、空気のような存在になると、必然的に遊びに繋がり、遊びがコミュニティ、文化に繋がるといった動きがある。そういうイメージを持たせたイノベーションが必要。学校教育だけではなく、地域教育、企業教育、および家庭教育にも繋がってくると良

い。(宮林座長)

- ・ 学校教育の中だけで解を見出すというスタンスではなく、全体のつながりの中でそれぞれの解を見出すというスタンスで臨み、全体として目指すところに持っていくというやり方であれば、様々の立場の意見を生かせるのではないか。学校教育の授業に焦点化した場合には、全体的な文脈の中で何を改善しなければならないのか、どのような支援をしなければならないのか道筋を見出していければ良い。(天笠委員)
- ・ それぞれのところで課題を抽出して、それを評価しながら、学校教育、家庭教育でこういうところをやらなければならないというような位置づけを見出すべき。森林に対する評価については地域、森林に拠って異なるため、地元の人の意見を聞いて、体験プログラムに反映できるような仕組みが必要。(宮林座長)

(3) 事務局から、森林モニターツアー、「2050年の未来予想図」ワークショップについて説明を行い、質疑応答を実施。各出席委員等からの意見は以下のとおり。

- ・ 「2050年の未来予想図」ワークショップについて、事前学習では森林の現状やSDGsに関するクイズを出題とあるが、中学生・高校生がこれからの森林について考えるためには、現在の日本の森林の状況、および問題について、しっかり捉えたうえで、その課題をどう解決するのかについて考えられると良い。全体としては良い。(山下委員)
- ・ 児童が自然体験を、自分ゴトとして発信するという考え方が面白い。自然環境と一口で言っても、日本全国それぞれ異なるため、地域性が重要なキーワードとなる。メッセージを伝える際に、風景や光景をつたえるような見せ方をすると伝わりやすい。子どもたちが自分たちの地域について知らない場合も多くあるため、綺麗な川や里山を発見しながらメッセージを発信していただけたら良いのではないか。(竹内委員)
- ・ 地元の人が地元の森について知らないということもあるので、地域の身近な方が参加できるような仕掛けがあったら良い。(吉弘委員)
- ・ 「2050年の未来予想図」ワークショップについて、「森林体験活動と組み合わせて実施するケースもある」と注釈があるが、是非とも森林体験活動を実施していただきたい。体験でしか意識は変わらないので、これからの未来を創っていくうえで大事なことからこそ、少しでも良いので森を歩いてみるなど、体験を取り入れていただきたい。(島田委員)
- ・ キャンプファイヤーなど、火を使う機会に薪割りが出来たら良い。現在、森林との関係は、かつて密だったものが疎になっている。疎を密に変えるような技を、イノベーションとして

探していくような工夫をすると良い。「子どもたちにとって森林とは何か」という問いを、親子向けツアーだけでなく、ビジネスパーソン向けのモニターツアーにおいても、アンケート等を通じて確認していただきたい。フォレスト・バトン・パスを通じて、世界のネットワークを広げる試みは面白い。(宮林座長)

(4) 事務局から今後のスケジュールについて説明。

以上